

28P-am03S

長期処方患者に対する薬剤師による中間介入研究：初回登録内容から見た患者背景

○山菅 友理子¹, 池田 佳弘¹, 赤沢 学¹ (1明治薬大)

【目的】近年、慢性疾患に関する長期処方が増加し、アドヒアランスの低下に伴う残薬等の問題が生じている。潜在的な問題解決につながる試みとして薬剤師が患者の次回受診までに途中介入する薬剤師中間介入研究を2015年5月24日から開始した。本研究では現時点の登録患者の背景と長期処方に関わる問題点の抽出を行った。【方法】対象患者は、40歳以上の糖尿病、高血圧症、脂質異常症患者のうち、処方日数が36日以上で、薬剤師による中間介入が必要と思われるものとし、薬剤師の判断で選択した。登録時には、服薬等に関する問題点（登録理由）、治療経過、服薬内容、検査値、生活リズム等を聞き取り調査した。また、高齢者に対して不適切処方を見出すスクリーニングツールであるSTOPPを用い、服薬内容の解析を行った。【結果】2015年11月23日時点では、全国90薬局で118例が登録された。内訳は男性が58%、70歳代が40%であった。登録された理由は「服薬状況に懸念がある」が最も多く、全体の50%以上を占めた。また、患者1人あたり平均8剤の薬を服用していた。さらに、STOPPを用いた解析では27例が不適切処方となった。特に、虚血性疾患の既往または現在治療中の患者では、バイアスピリンが不適切処方と判断されるが、13例の患者が処方されていた(48%)。【考察】高齢で傷病数や服薬数が多い患者が多数登録されていた。特に、服薬状況に懸念がある患者は8剤以上の多剤併用をしており、薬剤師による介入効果が期待される。今後は登録された患者について長期的にフォローアップを行う。追跡調査を継続により、薬剤師中間介入が問題の解決や治療効果にどう役立つか評価する予定である。